

伝えたい 平和のボタン 登戸研究所調査研究会のいま

戦後80年 過去から未来

秘密活動の

「現場」に誕生

駒ヶ根市中沢公民館に隣接する市民俗資料館は、1913（大正2）年に建てられた旧中沢小学校の木造校舎。太平洋戦争末期、上伊那地方に疎開してきた旧陸軍・登戸研究所の研究・製造部門の第2工場として、地元の子どもたちも動員して「ハバリユウ」と呼ばれる缶詰型爆弾などを製造していた。

3 平和資料館



待望の常設展示施設として昨春秋に開館した登戸研究所平和資料館。地域の歴史を伝える拠点として期待が高まる

の1階の一室約70平方メートルに有し、後世につないでいくとされる風船爆弾の模倣点となる待望の施設。関型などが並ぶ。今後は2階研究会の「平和資料館」が係者の証言をはじめ、研究の部屋も使い、展示内容を誕生した。調査研究の成果所で使われていた実験器具を協力してくれた地域と共などの史料、研究所で使われ、市施設を市立博物館が

管理し、調査研究会が運営する「行政と市民の協働事業」として実現した。

冬季は休館。3月から週末を中心に開館し、ガイドによる案内も行っている。

5月末までに564人が来館。県内各地をはじめ、県外からの訪問者も増え始めている。ガイドは約20人。ガイドの養成も進め、「語り部」を増やしていく考えもある。

資料500点

駒ヶ根に移管

登戸研究所を調査研究し、その存在を明らかにした赤穂高校（駒ヶ根市）平和ゼミナールの生徒や顧問の残した資料約500点が、収蔵されている明治大学平和教育登戸研究所資料館（川崎市）

から、駒ヶ根市立博物館に移管されることになった。

平和ゼミの顧問や調査研究会の共同代表を務め、2022年に死去した故木下健蔵さん（享年67）が、18年に明大資料館に寄贈した資料。生徒たちが集めた証言記録のほか、研究所の研究員だった元将校伴繁雄さんの証言映像記録も含まれている。今月2日に平和資料館を訪れた、明治大の資料館長を務める山田朗教授（68）は「元将校が証言する

資料。価値は評価。」「こののが木下さん」と思いをを事務局長のめ「調査研究と」研究会の活動の展示できる資大きな意味がされる資料も含まれる。地域の歴史をくか、改めて組み合わせが問われると話した。

地域の歴史後世につなぐ拠点